

長野県松本市「松本まると博物館」視察報告

実施期間：令和 6 年 1 月 30 日（火）～ 1 月 31 日（水）

行 程：1 月 30 日 AM 現地移動

PM 松本市立博物館にて聴き取り及び近隣の現地視察（案内付き）

1 月 31 日 AM まると博物館（分館）現地視察

視察先：旧制高等学校記念館、松本司祭館、開智学校（外観のみ）

【松本市まると博物館】

基本理念：地域に愛着を感じ、誇りを持つことで松本らしい未来を創造する。

構成施設：松本市立博物館を中核とし、市博分館を準中核施設、指定文化財（建造物）をテーマ拠点施設に位置付ける

運 営：行政（松本市立博物館）による管理運営

取 組 み：市民学芸員の養成、文化財の現地保存と活用

【設置経緯】

- ・バブル崩壊後の観光客の激減を受けた行政改革の一環で市立博物館の廃止が持ち上がり、社会教育機関としての博物館の役割を再認識した
- ・市立博物館の分館と位置付けてきた指定文化財の建造物が増加し、どう活用していくかが課題だった

【まる博の取組み】

▶市立博物館

- ・令和 5 年 10 月にリニューアルオープン
- ・分館（松本考古博物館、旧制高等学校記念館、山と自然の博物館、四賀化石館、安曇資料館）の運営
- ・地域文化財総合調査の主導
- ・市民学芸員養成講座の開催
- ・市民学芸員による展示解説

▶文化財総合調査

- ・未指定の文化財を含めた地域の文化財群を調査する
- ・市内の公民館を拠点に 35 の行政地区で、市職員 1 人につき 5～6 地区を担当し、調査を進める
- ・平成 11 年から始め、市民が自分の住む地域の文化財を抽出することからスタートし、平成 25 年から市民と文化財調査を進め、5 年後に「松本市歴史文化基本構想」を策定し、調査は現在も継続している

【問題点】

- ・まる博構想の実施までに時間がかかったため、文化財調査ではじめに関わった市民の高齢化が進んでしまった
- ・文化財調査は無報酬なので、当初は一部で批判があった
- ・昔から住み続けている人が少ない街中では、文化財調査の地区代表が退いてしまいがちである

- ・文化財調査の仕方を指導する市職員が少なく、一時は担当者1人が35地区中18地区を担当したこともあったほか、職員の異動や文化財への興味・技術の有無で指導できる者が限られる

【効果】

- ・松本は市民が学びに貪欲な風土があるので、市民の積極的な参加により独自の文化財調査を進めることができた
- ・文化財調査で指定・未指定に関わらず地域に残る文化財の洗い出しを行うことができ、まるごと博物館事業だけでなく、松本市文化財保存活用地域計画、歴史文化基本構想の策定に大きく寄与した
- ・文化財調査に関わった人が地域の小学校などで子供の学びに貢献している例がある
- ・文化財そのものの観光資源化ではなく、資源を紹介する人づくりを進めることができた

【今後の展望と課題】

- ・現状維持する方針だが、分館の学芸員がすべて市博（本館）に引き上げて集中管理をする形になっているため、分館の弱体化が課題である
- ・市民学芸員の向上心を保つために、館内だけでなく、屋外の文化財ガイド・ツアーなど、その人の得意分野に応じた活躍の場の確保できるようにしたい
- ・近年は市民学芸員養成講座に若年層の参加もあるが、子どもたちにさらに興味を持ってもらえるようにしていきたい
- ・文化財課で策定した歴史文化基本構想、文化財保存活用計画等で策定した関連文化財群を活用も検討している

【まとめ】

- ・構想策定時にはエコミュージアムの形での運営を考えていたが、「エコミュージアム」で枠を決めて始めようとする行き詰まることに早期に気が付いたため、松本市ではその理念を援用するにとどめ、地域の歴史を伝える・守れる人を育成することを事業の柱としていた
- ・まるごと博物館構想策定に携わった担当職員のひとりが市内の文化財と博物館双方に精通しており、その職員が文化財関係部署所属時に築いた地域住民との関係が、地域文化財総合調査での住民参画の土台になっていた。個人の性格とコミュニケーション能力、熱量の高さで成り立つところが大きく、市職員側が同じように次世代に繋げていくことができるかが課題である